

# 厚木市史たより

第26号

令和4年3月15日

題字は渡辺華山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。



図1 富井於菟  
(『龍野市史』第三巻所収)

## 女流民権家 富井於菟小考

厚木市史編集専門委員会委員 内藤佳康

### 一 はじめに

『厚木市史』近代資料編(1)（以下『市史』）  
第二章自由民権運動 第二節民権運動の凌

容と大阪事件（令和三年三月刊）に「富井於菟」に関する資料が一点（資料番号215・216）報告されている。大阪事件（明治十八年（一八八五）十一月二十三日発覚）に関する資金調達資料であるが、天野政立らを頼つて荻野村（現厚木市）に来村した依頼者が景山英子・富井於菟の女流民権家であることが注目される。

明治期に活躍した岸田俊子・福田（旧姓景山）英子・富井於菟の三女性民権家のうち、富井於菟については、これまで研究論文等が少ないようと思われる。於菟研究が近代女性史からやや後れをとっているのは、歳若くして没したため（明治十八年十二月二日没）、活躍の期間が短かったこと、彼女の残した文書・記録類が少ないこと、自叙伝がないこと等にも起因していると思われる。現在、富井於菟に関する資料として『龍野市史』、『明治女学校の研究』、『明治女学校の世界』、「富井於菟小伝」（『播州平野にて』）等がある。

『妾の半生涯』などがあげられよう。今回は現在残されている於菟関係の史料紹介をして今後の研究の一助としたい。  
なお、今回は、以上の文献を参考として纏めたものであり、後述する景山英子と富井於菟が明治十八年四月相州荻野村に渡韓計画のため資金調達に訪れていることを紹介してみたい。

### 二 富井於菟の生い立ち

於菟は慶應二年（一八六六）、播州龍野（兵庫県たつの市）、富井定助の四女として生まれた。兄・姉・妹（兄仙治、甚吉、姉なほ、のぶ、ため、於菟、妹よし）の七人兄弟であった。於菟の富井本家は元々醤油醸造業を営んでいたが、父定助が分家し酒醸造業を始めた。

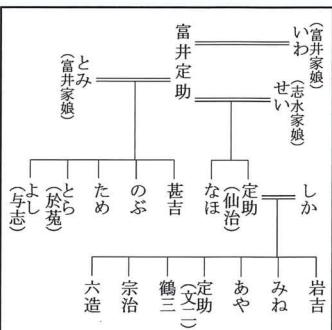


図2 富井家略系図  
(『龍野市史』第三巻所収)

明治十一年（一八七八）九月、龍野中学校に入学、十四年九月に卒業。翌十五年九月に小学高等科教員免許状を受けている。卒業後、一年間は裁縫や池坊生花などを習っている。この時期は、全国的に自由民権運動が高揚した時期であり、岸田俊子も女流弁士として各地で演説会を開いていた。おそらくこうした影響もあって、さらに向学

心を刺激されたのであろう。

岸田俊子は文久三年（一八六三）十二月五日京都で誕生。明治十五年から一年間先覚者として女権伸張を掲げ、各地を遊説、景山らの共鳴を得た。十八年中島信行と結婚、明治三十四年（一九〇二）五月一十五日、三十九歳肺結核で死去、号は湘烟、非常な才媛であつたという。墓所は大磯町大運寺。於菟は明治十六年、前年亡父に代わって戸主となつた兄定助（仙治）に宛てて「遊学ヲ請フノ書」を書いている。その要旨を紹介する。

維新以来、我国の文化の進歩は非常な速力で推移しており、国会開設請願は沸騰し世論となり明治二十三年国会開設の聖旨が示された。この聖旨にそむくことなく国会開設の準備を論ずる者は多いが、未だかつて誰一人女子教育の切要を説く者がいない。西洋諸国では、女子教育が盛んであり、東洋人には夢にも知らないことである。我等このような時期に生まれたからには、憤發勉強し弊風を洗濯して、女学首唱者の一人となることが國恩に報いることである。自分は中学校卒業後、二年を空費してしまつた。自分の遊学の時期は切迫している。岸田氏こそ我師にふさわしい人であり、同氏に就いて学びたい。このことが許されるなら、粉身碎骨して春太郎・甚吉両子の遺志を継ぐであろう。特別の寛典を以つて遊学の許可を願う。

この願いが叶い、於菟は民権運動の先覚者岸田俊子を師とすることを決意し、明治十七年二月、京都にあつた岸田俊子の門に入る。しかし、この年八月には京都を去り上京、板垣退助に面会している。板垣は於菟を坂崎斌（ジャーナリスト、小説家）に推薦、自由党の機関紙自由燈新聞社に就

職斡旋した。於菟は上京後、坂崎斌の家に住み込み通勤していたようである。その後、絵入自由新聞社に移り校正係りとして働いている。女性が新聞社社員として働くのは、我が国では初めてであつたという。

治十七年十月頃に上京、坂崎斌を訪問した折、初めて於菟と知り合いとなつた。

### 三 於菟と景山英子の縁

富井於菟と景山英子の交友については、福田（旧姓景山）英子著（『妾の半生涯』28頁）に於菟に関する詳しい記述があるので次にやや長文になるが紹介しておく。

「於菟女史」富井於菟女史は、播州龍野の人、醤油屋に生れ、一人の兄と一人の妹とあり。幼より学問を好みしかば、商家には要なしと思ひながらも、母なる人の丹精して同所の中学校に入れ、やがて業を卒へて後、其地の碩儒に就て漢学を修め、又岸田俊子女史の名を聞きて、一度その家の学婢たりしかど、同女史より漢学の益を受くる能はざるを知ると共に、女史が中島信行氏と結婚の約成りし際なりしかば、暫時にて其家を辞し坂崎氏の門に入りて、絵入自由燈新聞社の校正を担当し、独立の歩調を取られき。我国の女子にして新聞社員たりしは、實に於菟女史を以て嚆矢とすべし。斯くて女史は給料の余りを以て同志の婦女を助け、共に坂崎氏の家に同居して学事に勉めしめ、自から訓導の任に當りぬ。妾の坂崎氏を訪ふや、女史と相見て旧知の感あり、遂に姉妹の約をなし生涯相助けんことを誓ひつゝ、万秘密を厭ひ朝鮮変乱よりして、東亞の風雲益急なるよしを告げ、此時此際、婦人の身また如何で空しく過すべきやといひけるに、女史も我当局者の優柔不斷を慨き、心私かに決する処あり、いざさらば地方に

遊説して、國民の元氣を興さんとて、坂崎氏には一片の謝状を遺して、妾と共に神奈川地方に奔りぬ。實に明治十八年（一八八五）の春なり。両人神奈川県荻野町（荻野村）に着し、其地の有志荻野氏及び天野氏の尽力によりて、同志を集め、結局醸金して重井（大井憲太郎の変名）・葉石（小林樟雄の変名）等志士の運動を助けんと企だてしかど、其額余りに少なかりしかば、女史は落胆して、此上は郷里の兄上を説き若干を出金せしめんとて、唯一人帰郷の途に就きぬ、旅費は兩人の衣類を典して調へしなりけり。」

この記述は、於菟の出生から明治十八年大阪事件の資金調達のため相州荻野村へ景山英子と来村したことなどが述べられている（後述）。しかし資金調達は十分達成できなかつたため、於菟が一旦郷里に帰郷し、兄に資金の協力依頼するまでが記されている。

ここで於菟と景山英子との関係を知る上で、景山の生い立ちを述べておきたい。この景山英子（戸籍は英）に関する研究はすでに優れた研究報告が多数なされおり、生涯にわたる概要を知ることが出来る。景山は慶應元年（一八六五）十月五日備前岡山の野田屋町（岡山県岡山市）で生まれた。父景山確は備前藩の祐筆、母模子は備前藩士浦田重兵衛の三女。英子は四人兄弟の第三番目、明治二十六年（一八九三）頃福田友作と結婚。昭和二年（一九二七）五月一日、六十三歳でその波乱に満ちた生涯を終えた。その一生について今回の趣旨ではないので先學の諸論文を一読されたい。

することを決意した。こうした英子の影響もあり、於菟も一人で資金募集活動に参加する事になった。この計画は未然に大井等多数の関係者が大阪・長崎で逮捕（明治十八年十一月二十三日）されたことから大阪事件という。

### 四 荻野村への資金調達

大阪事件のおよそ一年前、相州愛甲郡一町二十数村で地租輕減運動が繰り広げられ、明治十一年十一月租税輕減哀願書が大藏卿松方正義に提出された。愛甲郡下の農家は米・麦・養蚕を主な収入源としており、松方デフレ政策により農家経済が大きな影響を受けることとなつた。このため地租輕減署名運動が展開された。この請願委員として、天野政立（あまのまさだて）、難波惣平（なんぱそうへい）、山川市郎（やまといちろう）、沼田初五郎（ぬまたはつごろう）、神崎正蔵（かんざきまさぞう）（いずれも民権活動家）が出京した。とりわけ天野はこの運動の中心人物であつた。天野・山川らは地租輕減有志者の総代として請願について坂崎斌方を訪問、この時同家に寄宿していた景山英子と面談し時勢を語り合い知己となつた。この渡韓計画の費用調達のため景山英子と富井於菟の二人は、明治十八年四月、荻野村を訪ねることになる。このとき景山と富井は、「不恤緯会社設立趣意書」（市史資料番号215）を作成して渡韓資金を天野らに依頼することとした。この趣意書は、資金調達のために作成されたものではあるが、女子教育の改良、所謂女権拡張を主張しておらず、景山・富井の根底にある女性の権利を男性と同等に拡張しようとする意図がみられる。この会社は景山英子が起こしたとその自伝に記しているが、下荻野難波家に残る趣意書は於菟の筆跡と見えてよく、文末の署名が首唱者景山英・富井於菟の連署となつてている。このことから、趣意書は景山英・富井於菟の二人で協力して作成したのである。

明治十七年十月二十九日、自由党が解党され、旧自由党左派の大井憲太郎らは朝鮮の独立運動（独立党）を支援し、これによつて事大党政権を支持していた清国と日本国との緊張関係を作り出し、内治改良（国内改革）の実行を迫るという計画を企てた。英子は、この朝鮮改革計画を大井憲太郎や小林樟雄らから聴き、実行計画に参加することとし必要な資金募集、爆發物運搬係等として活動

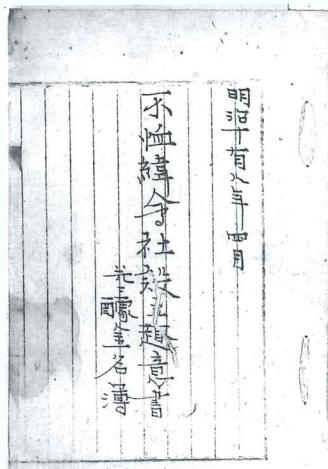


図3 「不恤縛会社設立趣意書  
并ニ醸金名簿」表紙

四月、二人は荻野村の天野政立を訪問、下荻野の松坂屋に止宿したが、『大阪事件関係史料集上巻』(63頁)、天野は生憎他行中で山川市郎に面接し醸金を依頼した(明治十九年一月十九日、大阪事件景山英子第七回訊問調書『大阪事件関係史料集下巻』28~30頁)。この資金調達は「三増(愛川町)・津久井(相模原市緑区)にも難波惣平を介して醸金を依頼しており、明治十八年五月八日付け、景山・富井から募集結果を尋ねる書簡を難波宛てに送っている(『市史』資料番号216)。しかし景山の訊問調書からは、「三増・津久井からの醸金は確認できていない。景山・富井は、荻野だけでなく相州の民権家から幅広く資金募集を行つたことが推測される。

## 五 於菟の帰郷と再上京

於菟は、この計画に対する醸金があまりにも少ないので一旦郷里に帰り兄に依頼することとした。

二人の衣類を質に入れ旅費として帰郷した於菟の消息については再び『妾の半生涯』(28~31頁)から要旨を紹介する。

英子は於菟と別れて三十日を過ぎても連絡がなく、さらに幾日か過ぎた頃、於菟から鉛筆書きの一通の手紙が景山のもとに来た。手紙の冒頭に「ア、しくじつたり誤りたり、取餅桶に陥りたり、今日は最早や曩日の富井にあらず、妹は一死以て

さらに九月初旬朝未明に、景山が借りている貸家に浴衣姿の於菟が訪ねてきて再会を果たした。この再会で景山は於菟の郷里での様子を詳しく聴くことが出来たのである。於菟は帰省して兄に資金援助の相談をしたが、全く聞き入れてくれず、二階の一室に閉じ込められ妹に看守させた。ようやく妹をすかして鉛筆を借りて手紙を出したとのこと。於菟はどうにかして上京して、この胸の苦痛を語り、その上で身の振り方を決めようと、妹より路費を借りて夜半寝巻きのまま出奔した。郷里の家にはこれから耶蘇教に身を委ねて志を貫かん、との手紙を残して上京した。私は最早同志ではない。約束に背く不義を咎めることなく長く交誼を許して欲しい、と景山に訴えた。景山は、「自らは道を変へつゝも尚ほ人のため國のために尽さんとは、何たる清き心地ぞや。妾が敬慕の念はいとゞ深くなりゆきたるなり。」と心情を吐露していく。この上京が、於菟と景山との人生歩みを大きく変えることになった。

## 六 明治女学校と於菟

於菟は「耶蘇教に身を委ねて志を貫かん」として景山と別れてから、どのような人生コースを歩むのであろうか。於菟は、景山と再会を果した後、明治十八年九月、キリスト教思想による女子教育を目的とする明治女学校の教員として教鞭をとることになる。

明治女学校は、明治十八年九月、キリスト教思想による女子教育のために木村熊一によつて東京麹町区飯田町丁目七番地に創立された。発起人は木村熊一、田口卯吉、植村正久、島田三郎、

君に謝せんばあらず、今日の悲境は筆紙の能く尽す處にあらず、只々二階の一隅に推しこめられて日々為す事もなく恋しき東の空を眺め悲哀に胸を焦すのみ、余は記する能はず幸ひに諒せよ」と記されており、景山はようやく於菟の現況を知ることが出来たのである。

東京府下下谷練塀町二十三番地  
植村正久寄留  
兵庫県播磨国揖西郡龍野町千九十九番地  
兵庫県平民 富井於菟  
十九年四ヶ年

教員履歴書

漢文学數学科受持員  
一明治十一年九月兵庫県下公立龍野中学校へ入  
学、同十四年九月卒業 同十五年九月兵庫県小  
学高等科教員免許状ヲ受ク  
但シ営業賞罰訴訟等ノ関係更ニ無之候

明治十八年九月  
右 富井於菟

この履歴書から、上京した於菟が著名な牧師である植村正久家(一八五七~一九二五)に寄留していたことが分かる。

於菟は明治女学校に教員として採用された心境を九月二十八日付けで兄定助宛てに手紙を送つてゐる。要約すると、二十一日から、女学校に通勤している。授業を始めている。退校後も植村氏に就いて英語を学んでいる。校長木村熊一氏は十二年間米国に遊學し、昨年帰國、イーストレーキは米国人教師、津田梅、植村季野(植村正久妻)、人見ぎん、島田まさ子(島田三郎妻)、木村どう(木村熊一妻)の履歴を述べ、教員は何れも歴々の学者であると記している。またこの女学校は、官立、公立、外国人の設立ではなく、少数の有志者の寄付金によつて成り立つてゐる。当分の間は無給無謝である。私等には現在車代として一ヶ月三円が支給されてゐる(『龍野市史』第六卷202~204頁)。

以上のように、於菟が新たに明治女学校に奉職し、希望に満ちた心境の手紙文である。於菟は漸く明治女学校で漢文学数学科受持員として、活躍の場を得た。しかし僅か三ヶ月後、腸チブスに罹り他界してしまうのである。

一方、景山英子は、渡韓計画による渡航について明治十八年十月に於菟に手紙を送り、思い残す事なしと記している（『妾の半生涯』31頁）。於菟はおそらく英子の実行計画をこの手紙で知ったのであろう。翌十一月二十三日大井憲太郎らによる朝鮮改革計画が発覚し、景山も逮捕拘禁される。於菟は十一月二十六日に腸チブスに罹患しており、果たして死の十日前のこの事件報道を知ったであろう。

## 七 於菟の死



図4 墓碑拓本  
(『龍野市史』第三巻所収)

於菟は明治十八年十二月二日夜、東京大学第一医院にて死去する。その死亡原因を「木村鑑子の伝」（明治女学校の研究）802頁）が伝えているので、抄録して紹介する。

「女学校の教員人見銀子、嘗て腸窒扶斯を病みて、殆んど死せんとせしに、鑑子、同教員富井於菟子と共に之を看護して為めに快癒に向ふに際し於菟子に感染し其病勢更に劇なりければ、人或ひは鑑子の此疾に罹らん事を患へたりしに、鑑子顧みずして曰く死生命あり、且於菟子遠方より來りて親戚の依るべき者なし、今同く校員の列に居

れり、我に非らずんば誰れか之を看護する者ぞと奮て湯薬の事を執りしも、不幸にして遂に死したれば、鑑子熊二氏を助けて葬儀を當なみ、厚く其生前教育の勞を謝せり」

とあり、於菟が同僚の看護中に腸チブスに罹患し不帰の人となつてまつたこと、葬儀は木村熊二、鑑子等学校関係者の手によつて執り行われたことが記されている。

○富井お菟子の葬式 明治女学校の教員富井お

菟子ハ腸窒扶斯病に掛り、去二日夜東京大学第一医院に於て死去せり、子ハ播磨国揖西郡龍野の人なりしが、夙に有為の志を懷きて東京に来り、近時明治女学校の教員となりて婦人社会の改良と教

育とに意を傾けしが、志未だ成らすして卒然遠く黄泉に赴きたり、千時行年二十有一、一昨日谷中天王寺に葬る、朋友故旧生徒等会葬する者甚た多く、何れも玉樹を埋めたることを悼傷せずハあらじと（東京横浜毎日新聞）明治十八年十二月五日第一面、第四千四百九十九号）

葬儀には朋友故旧生徒等会葬する者甚た多く、参列したと記している。なお、明治女学校は、資金難のため、明治四十一年十二月最後の卒業式が行われ、廃校した。

そして盟友景山が於菟の死を知るのは、大阪事件公判中である。『妾の半生涯』51頁で於菟の訃報を次のように記している。

「女史の訃音 夫より数日を経て翌廿年五月廿五日公判開廷の際には、恰も健康回復の期にありて、頭髪悉く抜け落ち、薬缶頭の醜さは人に見らるゝも恥かしき思ひなりしが、後にて聞けば妾の親愛なる富井於菟女史は、此時婆婆にありて妾と同病に罹り、薬石効なく遂に冥府の人となりけるなり。折ても頼みがたきは人の生命かな、女史は妾等の入獄せしより、只管謹慎の意を表し、耶蘇教に入りて、伝道師たるべく、大に聖書を研究し

居たりしなるに、迷心執着の妾は活きて、信念堅固の女史は逝きぬ。逝ける女史を不幸とすべきか生ける妾を幸といふべきか、此報を聞きたる時、妾は實に無限の感に打たれにき。」

と景山英子は感慨を述べている。

現在、於菟自身の記した伝記・記録が少ない中で、その実像を描き出すのは難しい。於菟の一生は家族の限界性を背負いながら、困難に立ち向かう姿が想起される。果たして一回限りのかけがえのない人生の一部分でも描くことが出来たのか、甚だ心もとない。もしかしたら於菟が英子と共に相州荻野村に来村した時が、自由で最も生き生きと輝いた瞬間なのかも知れない。

今後、明治十年代を駆け抜けた於菟のさらなる研究がなされることを願つて止まない。

### 主な参考文献

『龍野市史』 第三巻 龍野市発行 昭和60年3月1日  
『龍野市史』 第六巻 龍野市発行 昭和58年3月1日  
『明治女学校の研究』 青山なを著 慶應通信 昭和45年1月20日

『明治女学校の世界』 藤田美実著（株）青英社 昭和45年1月20日

『富井於菟小伝』（播州平野にて） 内海繁文学評論集 昭和59年10月27日

『妾の半生涯』 福田英子（株）岩波書店 昭和33年4月25日

『大日本人名辞書』 経済雑誌社 明治19年2月

『大阪事件関係史料集上・下巻』 未来社 昭和58年

昭和60年11月20日

『妾の半生涯』 福田英子（株）岩波書店 昭和33年4月25日

『大日本人名辞書』 経済雑誌社 明治19年2月

『大阪事件関係史料集上・下巻』 未来社 昭和58年

昭和60年11月20日

### 厚木市史たより 第26号

令和4年（2022）3月15日発行

編集 厚木市教育委員会文化財保護課

発行 厚木市

住所 神奈川県厚木市中町三一七一七

電話 046-225-2060

FAX 046-223-0086

【厚木市史たより】は厚木市ホームページにも掲載しております。